



Title	川端康成文学における絵画 [全文の要約]
Author(s)	李, 雅旬
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13840号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/78709
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Li_Yaxun_summary.pdf



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名：李 雅旬

学位論文題名

川端康成文学における絵画

本論文では、川端康成がその初期から晩年までの間に執筆した全作品のなかから、絵画と関係の深い作品群を取り上げて論じ、川端文学の表現様式を、絵画との関わりという観点から究明した。川端の言語観と絵画観を探りながら、初期の小説において言葉で絵を描出しない理由や、川端文学における言葉と絵の共犯関係および相互補完的な関係、また、言葉で絵を記述する際に用いられる対義結合・省筆のレトリック、さらには、物語の表に直接に登場しないものの、物語の展開に関与する川端所蔵の絵画作品、一枚の挿絵から小説を創出する方法などを、全三部一〇章にわたって検討し、川端文学における絵画の方法を総観した。

第一部 「小説が作り出す絵画」では、戦前期の川端小説に登場する絵画は架空の絵画であること、また、絵画は言語化できないという川端の絵画観により、戦前期の川端小説に登場する絵画はテキストにおいて描出されていない、ということを明らかにした。

第一章 言葉と絵の共犯—「夫人の探偵」論—

「夫人の探偵」論では、夫人を騙したのは言葉と絵であると仮定し、言葉への過信の問題と、それを補強するものとしての絵の問題について検討した。それを通して、事件が起こったのは言葉と絵の共犯によるものであることを論証した。言語不信の川端が「夫人の探偵」において、言語過信の人物たちを登場させて、さらに悲劇に遭わせたのは、言語過信を風刺するためである。

第二章 言葉と絵のコラボレーション—「春景色」の再検討—

「春景色」論では、これまでの先行研究で川端の主客一如の認識によるものであると読まれてきた「彼」と外界との関係や、「竹林と杉林とのある風景」を描きながら、「象と駱駝とが通つた、梅の絵」という題をつけるべきだという「彼」が描き続ける風景画とその題の関係を、換喩法と緩叙法の視点から解釈することを試みた。「春景色」において、絵によって表象されていない象と駱駝と梅は、言葉（絵の題）によって表象され、絵と題は相互補完的な関係にある。さらに、絵画制作の経緯が軸となった小説という系譜から、「春景色」を川端が試みた最初の絵画制作小説であると位置付けられた。

第三章 〈絵を描くことを描くこと〉—「童謡」論—

「童謡」では、制作中の画家が表象され、絵画制作のプロセスが記述されてはいるが、瀧野の絵の中身は描出されていない。三章では、〈絵を描くことを描くこと〉という主題に焦点をあてて、「童謡」を絵画制作小説として分析した。絵画は時間という要素を捨象した芸術であり、小説は継起する出来事の時間的順序を営む芸術であるという文芸

観を持つ川端は、絵画を小説のなかに取り入れる際に、時間的経過を加える方法の一つとして、〈絵を描くことを描くこと〉をテーマに選んだ。

第二部 「小説に取り入れられた絵画」では、昭和二〇年代の川端小説に登場する実在の絵をめぐる言説表現の特質に注目した。「夢」に登場する絵は対義結合のレトリックによって、「花のいのち」に引用された岸田劉生の牡丹の絵は象徴の手法によって、「明月」に引用された宗達の絵は省筆表現によって記述・描写されている。

第四章 「夢」論—対義結合的表現を中心に—

「夢」に見える表現と認識をめぐる川端の工夫は、「少女の顔に老婆の顔を重ねたやうな泣き笑ひ」という絵を表出したり、言語表現として対義結合というレトリックを用いたり、二元論を解消しようとしたことにある。川端文学における対義結合的表現も、二律背反的な傾向も、二元論的認識への抵抗である。

第五章 「花のいのち」の語りの仕組み—開かれた結末へ向けて—

「花のいのち」に登場する、芳子の父所蔵の岸田劉生の「竹籠に三輪の牡丹の花を盛つた、十号の油絵」は、実際に川端の手元にあった絵であり、絵のなかの牡丹の花は芳子の母の象徴となっている。さらに、「美しい人達」連作である「雪」と「花のいのち」を比較して、二作とも第一次物語言説が再開することなく、後説法で終わっているという構造をとっている。「雪」がそれで完結したとされている。同じ構造を持っているという意味でも、「花のいのち」は「雪」と同じように完結した小説である。

第六章 「明月」論—省筆の観点から—

「明月」論では、これまでの先行研究で明らかにされていなかった新聞記事（漢文学者の随筆）の典拠を明らかにした上で、川端がその新聞記事をどのように省略したり、誤って引用したりしたのかを実証的に分析した。さらに、墨絵をめぐる言説に見える省筆表現と、川端の文体志向とが一致しており、川端の目指す表現方法が作中に登場する宗達の墨絵の描き方に託されているとも言える。

第三部「小説において変奏される絵画」では、テキストに登場していない絵画作品が物語の展開に関与することについて考察した。昭和三〇年代に入ると、挿絵や川端所蔵の絵画作品に描かれたイメージが川端の文学テキストに生かされていることが多くなってくる。また、実在の絵に触発されてから、虚構の絵をテキストに登場させることもある。

第七章 「白雪」論—与謝蕪村を補助線に—

「白雪」では、弘子と小泉の逢引に小道具として蕪村の「実」の俳画を取り入れ、さらに、「虚」の俳画と蕪村の「宜暁」の趣向が通じていることから、蕪村の絵を最も生かした川端小説は「白雪」であると位置付けた。

『美しさと哀しみと』論では、二章にわけて、それぞれテキストの内部の絵と、テキストの外部に存在する絵について検討した。まず**第八章『美しさと哀しみと』論—「嬰兒昇天」を中心に—**では、作中作の「嬰兒昇天」の絵について検討することによって、

テキストの新たな一面、すなわち、『美しさと哀しみと』は、音子が絵画を通して、大木と文子の家庭に復讐を遂げた絵画制作小説であることを明らかにした。「嬰兒昇天」の制作経緯が『美しさと哀しみと』の物語の枠組みをなしているが、「嬰兒昇天」の制作経緯は記述されているものの、絵の内実は作中に具体的な記述がない。

続く九章「挿絵から読む『美しさと哀しみと』—結末の再検討—」では、『美しさと哀しみと』の物語内容と挿絵を合わせて分析し、とりわけ最後の一葉、およびそれに関連する小説の結末をめぐる解釈を試みる。詰まる所、初出の結末は古賀春江の「煙火」に描かれた画面に向かって進んでいたのであり、川端所蔵の絵画作品は物語の展開に潜在的に関与していたのである。なお、結末の加筆に関しては、時間論的観点から、加筆によってテキストに余韻が無くなったという批判的な解釈を導き出す。

第一〇章 挿絵から小説へ—「白馬」論—

「白馬」論では、掌編「白馬」の中で東山魁夷の挿絵に描かれたイメージがいかに川端の小説テキストに生かされているのかを考察した。テキスト内には絵を描く行為があり、その絵が重要な役割を果たすことによって、「白馬」は挿絵小説であると同時に絵画小説にもなっている。「白馬」に至っては、絵画との関わりが一層深くなっているのである。

以上の考察から分かるように、川端文学における絵画は、昭和初期からすでに重要なモチーフとして登場しているが、昭和一〇年までは、川端文学に登場する絵については描出がなかった。昭和二〇年代の小説においては、絵のイコノロジー（図像解釈学）が対義結合、象徴の手法、および省筆のレトリックによってさらに明確に行われており、そして、昭和三〇年代以降は円熟期に入り、テキストの表に登場していない絵画までが物語の展開に関与していたことが明らかになった。